韓国初等教育教科書の構成に関する一考察
―低学年『国語』・『国語活動』、統合教科を中心に―

太田　寛士・朴　民主

１　問題の所在

韓国の教育に関する情報は、日本で生活していても、テレビや新聞で紹介されているものを目にすることがある。例えば、受験生を救急車やパトカーで試験会場まで送り届けるという過酷な大学受験の様子がテレビ番組で紹介されることもあれば、2003 年のいわゆる PISA ショック以降、ハイスコアを残した国のひとつとして、英語教育や理数の教育を中心に、韓国での取り組みが新聞記事に特集として掲載されることもしばしばある。昨今は、両国間の歴史認識などに起因して、社会科教育、特に歴史教科書の編纂などについて関心が高く寄せられている。

上述のような取り上げ方、そして受けとめ方は、当人の立場や考え方によってさまざまな意味を持ちうるものだが、多くの場合、外国の教育と自国の教育との違いの感覚がその中核をなしている。その違いについて、我々は何を目的に、どのように比較するのか考える必要がある。市川（1990）は、比較教育学において、自国の教育の特質を考える場合に生じる困難を以下のように述べている。

> いわゆる近代学校は国民国家の形成と産業化の産物だが、殆どすべての国々がすでに工業化を達成したか、それを目指している今日、少なくともフォーマルな教育制度に関してはどこの国も大きな違いは無い。（中略）
> そうした国々の間の中でも幾つかの点で違いがみられる。それは恐らくそれぞれの国の歴史や伝統、文化や社会構造が異なることから生じてくると考えられる。（中略）しかし、そのいずれもがフォーマルというよりインフォーマルな面であり、各国の文化や社会構造に深く根差すものであるだけに、それを的確に把握するのは容易ではない。（p.11）

つまり、他国の教育と比較する際には、それぞれの国で直面し、解決しようと目論まれている課題は異なるものであり、文化や伝統を度外視して、それらを単純に比較して結び付けたり、参照したりすることはできない。教育学に、共通・一般化された方法論がないように、比較教育学においても、何をどのように明らかにするのかという目的の設定と方法論の選択は大きな意味をもつものである。比較教育学の方法に、①記述、②解釈、③並置（対置）、④比較という、4 段階でもって比較を行う、「段階比較法」というものがある。本稿では、この段階比較法の出発点にあたる「記述」を中心とする。

日本において、韓国の教科書研究の先行研究、特に国語教育学に関連して取り組まれたものには、足立悦男ら（2002，2003，2004）、斎藤里美（2003）などがある。足立らは、韓国中学国語教科書の目次のリスト化、学習の手引きの翻訳を行い、資料の形で、日本の同年代の学習者の使用する教科書の単元リストを対置することによって、韓国の中学校教育において、「国語」という教科が重要視している部分を検討し、日本の国語教育との違いについて言及している。

韓国の教育は、日本でいうところの学習指導要領にあたる「교육과정」（教育課程）が、その基礎

に位置づけられるが、日本における韓国教育の先行研究では「2009 年改訂教育課程」おける変化がしばしば指摘される[1]。現在、日本において公開されている韓国の教科書研究の多くは、「2009 年教育課程」に対応する教科書を対象に行われたものである。ちなみに、足立らが対象としたのは、2001 年改正の「第 7 次教育課程」の下で編纂された教科書であった。現行の教育課程は、2015 年に新教育課程が施行されたものである。現行の教育課程への移行に際しても、初等教育の教科書は改訂がなされているが、管見のかぎり、現行の教育課程に則った韓国の初等教育の教科書に関する先行研究において特に国語科についてはは行われていない。そのため本稿では、これからの韓国と日本との国語教育の特質を明らかにし、比較検討するための、基礎的研究の必要性を認め、教科書の翻訳を試みる。

２　研究の方法

韓国の初等学校で使用される教科書は国定教科書であり、全国共通の教科書が使用されている。本論考では、韓国の初等学校 1 年生が使用する教科書『1－1　봄』（統合教科の教科書）、『국어 1-1 가[2]』（国語の教科書）、『국어 1-1 나』（国語の教科書）、『국어활동 1-1』（国語活動の教科書）の目次の翻訳を行う。翻訳にあたっては、それぞれの教科書の特徴を明らかにする必要がある。第一に、当該教科書の成立背景を、日本における先行研究と、韓国の「教育府」が発行する『교육과정 총론（教育課程総論）』と『교육과정　해설（教育課程解説）』 の部分的な翻訳をもとに概観する。第二に、教科書の冒頭に記されている目次を、日本語に翻訳し、リスト化を行う。

韓国語から日本語への翻訳に関しては、主に朴が担当し、韓国語と日本語の特性上生じるずれを太田と朴で協議し、語義が崩れないと判断される範囲で太田が修正を行った。

３　2015 年教育課程の成立と経緯

現代の韓国の初等教育について考えるとき、避けて通ることができないのは、「統合教科」の存在である。統合教科とは、1980 年代に、「第 4 次教育課程」の下、低学年のスタートカリキュラムとして、日常生活に根差した学びを志向し、作られた教科群のことである。現行の「教育課程」にみられる「統合教科」の教科どうしの組み合わせは、「第 4 次教育課程」下で、道徳・国語・社会科をまとめた「ただしい生活」、算数・自然科をまとめた「かしこい生活」、体育・音楽・美術をまとめた「たのしい生活」の、3 つの合科教科書が作成されたことにその起源をみることができる。日本では、平成元年より新設された「生活科」が存在するが、教科横断的な性質としては、類似した教科である。井出（2011）は、韓国の「統合教科」と日本の「生活科」との違いを以下のように述べている。

> ①日本の初等教育低学年統合教科（生活科）に先行して、かつ段階的に、教科の統合を実現させたものであること、②日本の生活科が理科・社会を「廃止」して「新設」された教科とされ、以後その枠組みが一貫しているのに対し、韓国の初等教育低学年統合教科は、時期ごとに統合・分化を繰り返してきた経緯があり、日本と状況が異なる。（p.54）

[1] 1980 年来、継続して韓国の初等教育の課題とされてきた、「低学年統合教科」（日本でいうところの「生活科」のような合科的教科）とカリキュラム改正にくわえ、「「学年群」及び「教科群」の設定」（井出；2011，p.56）が行われ、韓国初等教育に大きな変化があったと指摘される。

[2] 教科書のタイトルにある「가」と「나」の字は、日本語の「いろは」のように、順番を示すのに用いられるもので、本稿では、「가」を「い」、「나」を「ろ」に対応させて翻訳した。

韓国は、「第 4 次教育課程」から、現行の「2015 年教育課程」に至るまでに、6 回の教育課程改訂を繰り返してきているが、現在でも、初等学校低学年の年間授業時数の約 4 割を占めている「統合教科」は、初等学校の低学年の教育において、一貫して非常に重要な位置にあるといえる。しかし、経験主義的な思想を背景にもつ「統合教科」への取り組みは、計算能力、読解能力などの基礎学習技能低下の原因になるのではないかと懸念する現場からの声をうけて、「第 5 次教育課程」から、国語と算数は分科化されることとなった。

現行の「2015 年教育課程」は、大部分「2007 年教育課程」を引き継いでいる。井手（2011）は、「2007 年教育課程」の性格を以下のように分析している。

> 第 4 次教育課程から第 6 次教育課程では、教育内容に対する量的適正化及び質的適合性に関する問題を解決しようとした現実的理由が作用し、第 7 次教育課程以後では、この問題は初等学校 1，2 学年児童の学校での学習は「主題」を中心として教授・学習することがより適切なものであるという指向が働いている。（中略）
>
> 2007 年改訂教育課程では、（中略）再び第 6 次教育課程期の統合論理が「復活」したような枠組みになった。統合教科とは言いつつも、児童の生活経験を扱う教科がその枠内で「再分離」した形となり、その面での統合の機能は「創意的裁量活動」という、教科の枠にはない部分へと譲る形になった（pp.56‐57）

井手は、「主題」を統合論理とした教科編成に関して、詳細な分析はしていないが、教科と学習者の実生活の統合を図ってきた「統合教科」について、統合といいつつも、統合教科を構成するそれぞれの教科の特性を認めて、教科編成を行ってきた経緯が認められる。カリキュラム上、「統合教科」と、その他の教科が、対をなしているわけではないが、それぞれの教科の役割というものが意識されていることがうかがえる。

「2015 年教育課程」で、改訂のポイントとして設定されたのは、幼初連携[3]強化と文字教育の重視である。韓国教育府は、「共働きの親が増加したことによって、学校の保育機能の強化が社会的に求められる時代となっている」（『教育課程解説』，p.33）ということに加え、小学校の授業時間数を国際比較した研究によって、韓国の低学年の授業時間数が少ないという結果が提示されたため、全体的な授業時間数の増加を図った。その結果、年間 64 時間を増やすこととなったが、学習者の負担増加も懸念され、「創意的な体験活動[4]」という形で時間数が調整されることになった。

低学年の国語では、言語技能の習得が目指されることとなった。従来、幼児教育もふくめた、段階的なカリキュラム構成ではなかった文字教育について、「幼児教育課程での自然な学習経験に基づいて、小学校 1～2 年生では、文字を完全に習得することができるように、文字教育を強化」（『教育課程解説』，p.33）するようにカリキュラム編成が行われた。特に初等教育段階に注目すると、文字の表記・構成から、読み方などを含む、文字の授業が、これまで 27 課だったものから、62 課に増加しており、丁寧な指導が構想されている。

---

[3] 公立、私立の違いはあるが、韓国では幼児教育を行う施設に対して、日本のように保育園、幼稚園のような区別する呼称はないため、本稿では、幼児教育と初等教育との連携のことを「幼初連携」と表現した。

[4] 「創意的な体験活動」は、日本でいうところの特別活動と総合的な学習の時間にあたる。

４　教科書の構成

韓国の初等学校 1 年生で使用される教科書は、表 1 に示しているように、年間に、国語関連が 6 冊となっている。単純に冊数で比較することはできないが、日本は通常、国語の教科書が上下の 2 冊、書写とことばのきまりが別にあったとしても、韓国の方が冊数は多い。具体的にページ数でみてみると、韓国の『国語』と『国語活動』の合計が、約 650 ページあるのに対して、日本の光村図書の教科書は上下で約 250 ページである。

【表 1：韓国の初等学校 1 年生で使用される教科書一覧】

区分		1 年生
教科	国語	国語 1－1 い 国語 1－1 ろ 国語活動 1－1 国語 1－2 い 国語 1－2 ろ 国語活動 1－2
	数学	数学 1－1 数学 数学 1－2 数学
	ただしい生活／たのしい生活／かしこい生活	春 1-1 夏 1-1 秋 1-1 冬 1-1
創意的な体験活動	安全な生活	安全な生活 1

（表は『교육과정총론』（教育課程総論）p.18 ページを参考に作成）

年間の授業時間数の割り振りを見てみると、表 2 に示したように、国語は、低学年群で 448 時間、おおよそ第 1 学年では、その半分の 224 時間となっている。日本は、表 3 に示したように、第 1 学年で 306 時間、第 2 学年では 315 時間、合わせて 621 時間となり、比較すれば 173 時間、日本の方が、韓国より国語の授業が多いことになる。韓国では、国語と国語活動の教科書は分冊されているが、授業時数のうちで、国語と国語活動の時間が分けられているわけではない。日本で、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が国語とは切り離されて、独立して扱われるわけではなく、「書写」や、「ことばのきまり」といった形などで、国語の時間として扱われている状況と類似している。つまり、国語の授業の中で、『国語』の教科書と、『国語活動』の教科書は、授業内容によって、平行して使用されるものである。また、『国語 1－1 い』と『国語 1－1 ろ』の 2 冊と『国語活動 1－1』が同時期に使用される教科書の組み合わせということになる。

【表 2：韓国の初等学校 4 年生までの年間授業時間数】

<table>
<tr><th>区分</th><th>1・2 年生</th><th>3・4 年生</th></tr>
<tr><td>国語</td><td rowspan="2">国語　448</td><td>408</td></tr>
<tr><td>社会／道徳</td><td>272</td></tr>
<tr><td>数学</td><td rowspan="2">数学　256</td><td>272</td></tr>
<tr><td>科学／家庭技術</td><td>204</td></tr>
<tr><td>体育</td><td rowspan="2">正しい生活　128
かしこい生活　192
たのしい生活　384</td><td>204</td></tr>
<tr><td>芸術（音楽／美術）</td><td>272</td></tr>
<tr><td>英語</td><td></td><td>136</td></tr>
<tr><td>小計</td><td></td><td>1768</td></tr>
<tr><td>創意的な体験活動</td><td>336</td><td>204</td></tr>
<tr><td></td><td>1744</td><td>1972</td></tr>
</table>

（表は『교육과정총론』（教育課程総論）p.9 を参考に作成）

【表 3：日本の小学校 4 年生までの年間授業時間数】

区分		第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年
各教科の授業時数	国語	306	315	245	245
	社会			70	90
	算数	136	175	175	175
	理科			90	105
	生活	102	105		
	音楽	68	70	60	60
	図画工作	68	70	60	60
	家庭				
	体育	102	105	105	105
道徳の授業時数		34	35	35	35
外国語活動の授業時数					
総合的な学習の時間の授業時数				70	70
特別活動の授業時数		34	35	35	35
総授業時数		850	910	945	980

（表 3 は、学校教育法施行規則別表第一に従って作成）

韓国の国語の授業の作り方を考えるために、以下では、『教師用指導書』を参考にした。『教師用指導書』には、『国語』と『国語活動』の関係について、「①『国語』は主の教科書であり、『国語活

動』は、補助教科書である。②『国語活動』には、『国語』で学習した内容を確認し、練習をすることを通して、国語能力を内面化、定着化する意義がある。③『国語活動』は、単元ごとに学習内容を活動と連携して構成する」（p.28）と明確に示されている。『国語活動 1－1』は、教科書という位置づけではあるが、授業中に使用する活動例集という機能に加え、ドリルのような機能も持ち合わせており、とくにハングル教育に力を入れている低学年では、書き取りの問題などが多く掲載されており、宿題などにも活用されるものである。

韓国における国語の領域構成は、「教育課程」上の表記の配列順に並べると、①聞く・話す、②読む、③書く、④文法、⑤文学という 5 つの領域から構成されている。当然この領域構造に従って、国語の教科書も構成されているわけであるが、いわゆる教材単元のように、一つの教材を核に単元が組織されているわけではない。単元ごとに、学習態度を含む、学習目標が設定され、その目標達成のための教材が、「国語」と「国語活動」の二冊の教科書でもって構成されている。

【表 4：教師用指導書の単元 1「正しい姿勢で読み書き」の表記例】

<table>
<tr><th rowspan="2">単元名</th><th rowspan="2">単元達成基準</th><th rowspan="2">単元学習目標</th><th rowspan="2">時間ごとの学習目標</th><th rowspan="2">学習段階</th><th colspan="2">ページ</th></tr>
<tr><th>国語</th><th>国語活動</th></tr>
<tr><td rowspan="6">1 正しい姿勢で読み書き

共同体と、対人関係力量</td><td rowspan="6">聞く・話す
(5) 話す人と、言葉の内容に集中して聞きます。
読む（1）単語、文章、声を出して読む
書く（1）字を正しく書く</td><td rowspan="6">正しい姿勢で、単語を読んだり、書いたりします。</td><td>1.正しく聞く姿勢を身につけることができる</td><td>準備学習</td><td>6－11</td><td></td></tr>
<tr><td>2.正しく読む姿勢を身につけることができる</td><td>基本学習</td><td>12－13</td><td></td></tr>
<tr><td>3－4.声を出して、単語を読むことができる。</td><td>基本学習</td><td>14－17</td><td>6－7</td></tr>
<tr><td>5－6.正しく書く姿勢を身につけることができる</td><td>基本学習</td><td>18－23</td><td></td></tr>
<tr><td>7－8.単語を書くことができる。</td><td>基本学習</td><td>24－27</td><td>8－9</td></tr>
<tr><td>9－10.先生と友達の名前を書くことができる。</td><td>実践学習</td><td>28－31</td><td></td></tr>
</table>

（表 4 は、『教師用指導書』の p.50 を参考に作成）

1：下線は、表中で網掛けだった部分に対応させて筆者が引いた。

2：表中、「単元名」の列に示した枠内の文言「共同体と、対人関係力量」は、「核心力量[5]」と言わ

[5] 未来の社会が要請する人材に必要な資質能力のこと。それらを「核心力量」として明示し、教科教育のレベルでも評価の在り方や、授業方法の改善などによって、取り組むことが要請されている。自己管理力量、知識情報処理力量、創造的な思考力量、審美的な感性力量、意思疎通力量、協同体力量の 6 つが基本的な力量として定められ、教科ごとに細分化されている。（『2017 학년도초등학교교육과정편성안내』p.29 参照）

れる資質能力。

５　まとめ

本稿では、韓国の初等教育における国語学力形成に関する検討を、年間授業時数の比較や、教科書の構成、目次の翻訳を通して行った。しかしながら本稿では、表面的な分析にとどまってしまったことは否めない。以下、本稿で明らかになったことと合わせて、今後の研究の課題を示してまとめとしたい。

国語という教科が、「統合教科」から分科化されたとはいえ、韓国の教育における、ことばの力[6]の育成は、「統合教科」とのバランスの上に成り立っているということは指摘することができる。韓国の低学年の国語は、限られた時間数の中で、多くの時間が、文字の習得に割かれているという状況になっている。実際に、今回翻訳を試みた教科書も、『国語 1－1 い』と『国語 1－1 ろ』の全 8 単元のうち、半数の単元は、文字教育のために設定されている単元である。（第 2、3、6、7）今回の調査の結果からは、単元内に掲載されている教材の性質までは詳細に記述することができなかった。かつて、足立悦男ら（2002）は、中学校の国語の教科書についてであるが、日本の教科書との比較の中で、韓国の教科書の性格を「あまりにも構成されすぎていて自由度という点で少ない」（p.92）と表現していた。実際に教科固有に設定されている 5 つの領域に対応する、どのような性質の教材が配置されているのか、またどのような学習課題が設定されているのかを記述することは今後の課題である。

「統合教科」とのバランスという表現をしたのは、もともと「正しい生活」という教科群に、「国語」も編成されていたという経緯も含め、教科横断的な性格の教科である「統合教科」の教科書の中では、「国語」的な活動も多く取り組まれていることが指摘できるからである。とくに「統合教科」では、生活上の場面を取り上げながら、話し合いの活動に取り組んだり、話の要点をまとめて書いたりする活動など、国語科で育成が目指されることばの力に関連する活動が多く含まれていることが指摘できる。つまり、「統合教科」があることによって、国語の授業の中だけでは扱いきることができない、実践的、実用的なことばの力を学ぶ場が創出されているといえる。

韓国では、1997 年告示の「第 7 次教育課程」において、OECD の教育政策検討（policy review）を受け、「グローバル・スタンダード」を意識した、ナショナル・カリキュラムの構築が目指された。井手（2011）は、こうした OECD のしめしたコンピテンシー基盤の学力観を踏まえて構想されたカリキュラム改革について、以下のように分析している。

> それ（力量（competency）＝筆者補）を国家が仮に「学力」としてオーソライズし「教科」において推進しようとしても、これまでの「知識『量』」と「選抜」が「学力」の価値を支配してきた文化的・社会的背景ゆえに、「学力」の定義について葛藤を誘発しており、その調整をどこが担うのかが曖昧なまま、グローバル・スタンダードを意識した新しい「学力」を「さまよう」こととなった。（p.61）

韓国の教育府は、政権交代に伴う教育政策の方向性の違いはあるものの、20 年来、グローバル・

[6] ここで用いている「ことばの力」という表現は、韓国の国語科で重要視されているハングル教育を軸に、コミュニケーション能力、さまざまなパフォーマンス能力など、言語運用能力までを含めた包括的な意味で用いている。

スタンダードに則ったカリキュラム編成を試みてきた。現行の「教育課程」に関して、総合的に、「ことばの力」をどのようにとらえ、「国語」という教科の教育と「統合教科」との関連の中で、どのような学力形成とカリキュラム編成が目論まれているのか、「教育課程」のさらなる考察を通して研究していく必要があると考える。

資料：教科書の目次の翻訳

【表 5：『국어 1-1 가』（国語 1-1 い）、『국어 1-1 나』（国語 1-1 ろ）の目次】

『국어 1-1 가』（国語 1-1 い）			
	単元名	ページ数	備考
1	楽しい心で	6	学習の導入
2	面白い一文字	22	
3	字を作りましょう	54	
4	気分を話しましょう	74	顔の絵をみて、話すことを通して、感情を表す語彙を増やす。
	おまけ	107	
『국어 1-1 나』（国語 1-1 ろ）			
5	わくわく	136	学習の導入
6	文章を正しく	182	
7	ちょうどよく分けて読みましょう	208	ハングルは、表音文字のため、単語ごとに分かち書きをし、意味のまとまりを意識して読むことをねらいとする単元。
8	経験したことを書きましょう	232	

【表 6：国語活動『국어활동 1-1』（国語活動 1-1）の目次】

	単元名	ページ数	「国語」との対応
1	正しい姿勢で読み書き	6	1 楽しい心で
2	楽しくㄱㄴㄷ	10	2 面白い一文字
3	みんな一緒に아야어여	28	2 面白い一文字
4	字を作りましょう	40	3 字を作りましょう
5	優しく挨拶しましょう	60	4
6	終声（パッチム）がある字	64	
7	考えをしめしましょう	76	6 文章を正しく
8	声を出してきちんと読みましょう	84	7 ちょうどよく分けて読みましょう
9	絵日記を書きましょう	92	8 経験したことを書きましょう
10	字の書きとり	97	

【表 7：統合教科『1－1　봄』（1－1　春）の目次】

			単元名	ページ数
1	学校に行ったら			
	1		はじめましょう	
		1	学校に行ったら	8
	2		やってみましょう	
		1	私たちは一年生	14
		2	学校へ行く道	20
		3	運動場で	22
		4	こんな教室もあります	26
		5	友達にこんにちは	30
		6	約束しましょう	32
		7	仲良くなりたいな	36
		8	肩を組もう	40
		9	教室を飾りましょう	42
	3		まとめましょう	
		1	“学校にいったら”さようなら	44
2	ほのぼの春の庭			
	1		はじめましょう	
		1	ほのぼの春の庭	48
	2		やってみましょう	
		1	授業づくり	54
		2	春が来ました	56
		3	春　友達に会いましょう	58
		4	春！うれしいな	62
		5	春をまねしましょう	64
		6	春に庭に住んでいる友達	68
		7	命は大切です	70
		8	種をまく	72
		9	授業づくり	76
		10	新芽と友達になって	78
		11	芽が伸びる	80
		12	新芽と花	82
		13	私たちが手伝ってあげるよ	84
		14	木、大好きだよ	86
		15	いっぱいさわって　花と遊ぼう	90

		16	授業づくり	92
		17	約束しましょう	94
		18	お花見に行きましょう	98
		19	お花見に行ってきました	100
	3		まとめましょう	
		1	“ほのぼの春の庭”さようなら！	102

【参考・引用文献】

○日本語文献
足立悦男・申 美熙（2002）「韓国中学国語教科書の研究（1）」『島根大学教育臨床総合研究 1』pp. 79－100
足立悦男・申 美熙（2003）「韓国中学校「国語」教科書の研究（2）」『島根大学教育臨床総合研究 2』pp.41－57
足立悦男・朴 恩実（2004）「韓国中学校「国語」教科書の研究（3）」『島根大学教育臨床総合研究 3』pp.15－33
市川昭午（1990）「比較教育再考―日本的特質解明のための比較研究のすすめ―」『日本比較教育学会紀要第 16 号』pp.5－17
井出弘人（2011）「韓国における人材育成政策の転換とナショナル・カリキュラムの変化―初等教育低学年統合教科を中心に」『長崎大学教育学部紀要：教育科学』75 号，pp.53－62
斎藤里美編（2003）『韓国の教科書を読む』明石書店
長島啓記編著（2014）『基礎から学ぶ比較教育学』学文社
二宮皓（2006）『世界の学校―教育制度から日常の学校風景まで―』学事出版
山田頌（2012）「韓国の初等統合教科である「かしこい生活」に関する研究―成立過程とカリキュラム分析を中心に―」『生活科・総合的学習研究 10』，pp.59－68
○韓国語文献
ソウル教育大学／教員大学国定図書国語編集委員会編（2017）『교사용 지도서』（教師用指導書）
【参照 HP】
교육부（教育府）:『교육과정총론』（教育課程総論）、『교육과정해설』（教育課程解説）、『2017 학년도초등학교교육과정편성안내』（2017 年度初等学校教育課程編成案内） http://www.moe.go.kr（最終閲覧日 2017/05/14）
文部科学省 :『小学校学習指導要領』http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/（最終閲覧日 2017/05/14）

（愛知県幸田町立幸田小学校）
（仁川ハンギル初等学校）